



令和5年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業
国語・算数・理科・デザイン！
最終成果 BOOK



国語や算数、理科や社会を学ぶみたいに……、地域を観察したり、地域を感じたりする



そんな『デザイン』の授業があつたらしいのになあ……

「国語・算数・理科・デザイン！」最終成果報告会 | 2024.3.10 | 会場：ABS秋田放送1F多目的ホール

ただただ観察する、デザインの旅

日常にあふれている、日々の隅々を『観察』することをきっかけに、地域を意識し、地域とつながろうとする感情を育み、そしてその先に何らかの行動・アクションを見出そうと、もがき続けた半年間のデザインプログラム「国語・算数・理科・デザイン!」。

県内の高校生で構成された合計8チームが、何気ない日常を観察し、半年間『地域とつながるとは、どういうことだろう?』と悩み続けました。そしてその先に自分自身の本当の感情が動き出すのをじっと待ち、耐え続けた『葛藤の過程』を正直に愛で合い、大切にしてきました。

身近にある何気ないモノや風景、はたまたヒトの観察トレーニングからはじまつた半年間のデザインの旅。今まで感じたことのないような、答えのない手探りな初めて

の旅にチャレンジしてくれた高校生たちの中に湧き出てきた、嘘偽りのない半年間の『本音(過程)』。今回、それを地域の方々にもしっかりと見届け感じていただきたいと思いまして、最終成果をまとめたのがこの一冊です。

どこかで見たことのある、いかにも正しい答案に頼ることなく、悩み苦しんだ過程をそのまま見せ、曝け出すということは、とても怖くて勇氣のいることだと思います。しかし、その不安と葛藤にめぐることなく、『地域とつながる実感』を模索し、泥臭く掴み取ろうとした軌跡こそが、参加者全員の成長の証であり、この事業の成果だと信じています。

M^{*}₁ そんな全8チーム、そして運営チームのMOD&CO^{*}₂ が必死に駆け抜けた半年間の軌跡を、たっぷり、そのまま地域の方々に感じていただけたら幸いです。

※1 チーム MOD: プロジェクト全体を運営するチーム名。ちなみに「MOD」は「もっとお尻を出す」の略

※2 チーム COD: このプロジェクトに参加していた卒業生(高校生等)で構成された

MODの運営を支えてくれる、心強いパワフルな若手チーム。ちなみに「COD」は「ちょっとお尻を出す」の略



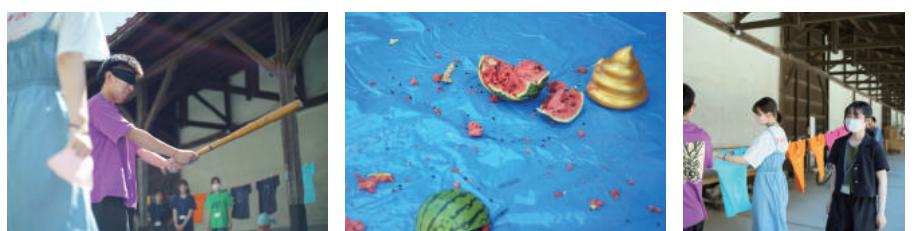
反根本心の 引き抜く

キュアまーめいど

観光地と呼ばれる
地域にある高校に通う
高校生の本音



チーム『キュアまーめいど』の左から、佐藤りあらさん、門脇みなみさん、澤田京弥くん



ディベート部の先輩に誘われて同じクラスでチームを組んだ角館高校の3人組『キュアまーめいど』。同じクラスといっても、仲良しというほどではなく、チーム名を考えるのに苦戦。お互い好きなものを出し合っていくと、プリキュアと海にちなんだものが好きという共通点があったことから『キュアまーめいど』に決定。

2回目の集中ワークショップの時に、I&C Creations (p.32) が観察・発見した、秋田市にある不思議な空間の写真を引用したことから、2チーム合同で不思議空間の観察することに。2チームそろって秋田駅に集合し、謎を解くべく近隣の店舗にヒアリングを敢行（詳細はp.32）。勇気を持つ家のチャイムを鳴らしたり、出会った人に「あの扉のこと、知りませんか？」と訊ねたり、観察の先に地域の人々に話を聞きつながる体力をつけていった。

チームで活動すると、お互に感情が湧き上がってくる。「真剣に話してはいるけど、チームに話を聞いて貰えていない気がする……」「自信がないくて、この



[発表資料提供：キュアまーめいど]

まま活動を続けていいものか……』と、互いの距離感や関係性が明らかになる。でも、思っていることをチームに率直に話してみれば、コミュニケーションの取り方が違ったり、自分にはないものを持っていることを認め合っていることがわかる。一人ひとりの凸凹が見えて、チームの関係性はぐっと近くなつていった。

3人が住んでいる地域は、田沢湖、大曲、桧木内。3つとも秋田が誇る観光地。通う高校は角館、秋田の中でも有名な観光名所のひとつ。みちのくの小京都と言われ、武家屋敷が続く美しい街並みがある。チームの一人・澤田くんはこの景色が好きで角館高校に進学を決めた程だ。10月に開かれた中間報告会での発表で、通学路で観光客の方に声を掛けられたエピソードを共有してくれた。武家屋敷を通つて駅に向かっていると、観光客から「この道が通学路なんですか？」「この町並みは本当に美しいですね。通学路だなんて羨ましい！」と笑顔で声を掛けられた。しかし、その何気ない一言に、門脇さんは苛立ちを覚えてしまった。そ

最終成果報告会では、「反抗心の根本を引っこ抜く!」をテーマに発表。生まれ育った地域を素直に受け入れられない状態・理由を、3つの言葉のデザインにならべて、地域の人たちがいつだつてのり、敢えて音楽ライブ会場では最前列で応援するのではなく、後方で彼氏のようないい面持ちで静かに見守るような「後方彼氏面」。地域への愛着はあるけれど、素直に表現できないもどかしさを、こういった言葉で表現してくれた。



[発表資料提供:キュアまーめいど]



地域につながるとき、たくさん的人に会わざとも、無理に課題解決をせずとも、我慢強く自身たちの内面で感じていることと目を向ければ、そこには自然なカタチで、地域の人たちがいつだつてのりである。

悪態をつきたい衝動が自分の中に起こつた



[発表資料提供:キュアまーめいど]

の場では言い返さなかつたものの、内心では「毎日通つてゐるし、生まれもこの地域でいつも見てるから、綺麗だなんて思わない」と悪態をつきたい衝動が自分の中に起こつたという。内陸線を通学で利用する彼女は、平日の朝夕に乗車するときは座れるものの、模試などで土日に出掛けたときは、観光客が多いため満員電車でしばらく立たざるを得ない。観光という非日常で訪れる人たちに、日常で出会う高校生たちの心には、いろんな感情が蠢いている。

大曲といえば花火。でも、暮らしていける彼からすると「ただうるさいだけ。友だちの家でゲームをする言い訳に花火大会を使う」くらい厄介なもの。

スキーリゾートで風光明媚な田沢湖。住んでいたる彼女からすると、「そもそも、田沢湖で遊ばない。遊ぶなら大曲か秋田」と興味がない。チーム3人ともが、観光地としての見え方と暮らしている地域のギャップに反発を感じていた。

ギャルマインズ「南高博命」!

DEAR



チーム『DEAR』の、進藤悠花さん(左)、保坂愛来さん

この事業が始まる前に開催された事前説明会にも、積極的に2人揃って参加してくれていたチーム『DEAR』と、最初にきちんと顔を合わせたのはオンライン面談のこと。急遽、昨年夏の大雨予報のため保坂さんのみの参加となり、公共施設のような空間からのオンライン参加だったのだが、全く目を気にする様子もなくスラスラと喋ってくれる保坂さん。例えば「保坂さんは友人たちからどういう人だと思われている?」という質問には「**多分パリピ!**」と即答。「でも、**結構面白いにやっています!**」と明るく答えてくれた姿が印象的だった。イマドキのJKと安易に括ってしまうことにはいささか違和感を覚えるが、彼女の屈託のない天真爛漫さがすごく安心させられるものに映ったことは確かだった。

対面での1回目の集中ワークショップには都合がつかず参加できなかつた2人は、秋田市の松倉で開催された2回目の集中ワークショップの場で、自分たちの観察センスの本性を露わにする。かき氷の味に対する思い込みの観察（ブルーハワイ味ってどんな味なの？）や、「**推し**」のためならいくらでもお金を払えてしまうという狂った金銭感覚の観察、雨が降る音（オノマトペ）の観察の先に見える言葉の世界の広がり等々……、他のチームとは一味違った観察の切り口に、このチームの今後が楽しみに思えていたMODだった。

が……しかし、その後しばらくの間、『DEAR』の2人とは音信不通になつてしまふ……。月日がどんどん過ぎていく代わりに我々の焦りはどんどん増幅していく。幸いなことに『DEAR』の2人が通う高校にはH&C Creations (P.32)という別のチームが在籍していたことから、そのチームのメンタリングを実に『DEAR』の2人にも参加してもらう約束を取り付けることができたのだ。



多分パリピだけど、結構真面目です

いざ、久々に対面してみると2人は茶目つ気たっぷりに「Slack見てなくてごめんなさい!」と、こちらの心配はどこ吹く風といった様子（汗笑）。その後もグローバル人材や地域医療のこと、高校の制服への不満や祖父との思い出等々、2人の日常の興味の話を聞き、次回は運営メンバーMODの柚木の勤務先でもある、秋田公立美術大学へ集合することに決め一日解散となつた。

そして2月20日。最終発表まで約3週間を残しての2人の再会。いつものように自然体で美術大学に到着した2人が案内されたのは、美大の学内でもとりわけカオスな部屋で有名な柚木研のゼミ室だつた。前回の話の延長から試験勉強の話になると、2人がカバンから取り出したのは、表紙がラインストーンでデコられた参考書だった。2人が言うには、辛い勉強も教科書や参考書が可愛くデコられていれば苦ではなくなるとのこと。偶然ながら、柚木研の学生の間でも「デコる」とことが流行した時期があり、その時に買い集めたラインストーンのストック

が大量にあった。それらを『DEAR』の2人に差し出し、ひとまず参考書の「追いデコ」することに。『DEAR』の参考書は、もはや何の本なのか初見では分からぬレベルまでキラッキラに装飾されたのである。気がつけばそれだけで3時間。我々のこの時間は一体何だったのだろう？ でもなんだかスッキリ！ ギャルマインドで満たされた感じや達成感も確実にある。こうしてまた対面の時間が一瞬で終わっていったのである。

そして、その後も安定して音信不通になった『DEAR』の2人（汗笑）。念の為何度か連絡を試みるも、特に進捗の確認もできずに最終発表会を迎えてしまう。だが、それでも不思議とギャルマインドで何とか乗り越えてくれるような、そんな期待と不安があった。「最終成果報告会当日は、私服で構いません」と全員に案内を出していたにもかかわらず、敢えて高校の制服で現れた2人にどのような発表になるのか確認したところ、そつと「国語・算数・理科・デザイン！」Tシャツを出して見せてくれた。そこには秋田



……と、そんな半年間お騒がせチームだった『DEAR』の2人から最終成果報告会が終わった日の夜、この半年間を振り返ってみての感想と反省、そして運営陣へのお礼のメッセージが届いていた！ 次ページ(P14-15)へ急げ!!

県の形がデコられており、装飾がされていたようだった。どうやら気に入っていない制服の代わりに、デコったTシャツについて発表したいのだと。それにしても、あれだけ夢中でやった参考書ほどデコの威力が足りない……と、その場で感じたのが本音、そして午後の発表へ。いよいよ緊張する中で迎えた『DEAR』の発表の出番。そこには、運営チームのMOの心配や予想をはるかに超える量の考察と提案が、「南高革命」と題して並んでいた。最終的に秋田南高校の志願者数が年々減少傾向にあることを懸念した2人は、南高校の生徒にInstagramで母校に対する“文句”をアンケート收集し、そのデータをもとに、ギャルマインド全開で南高の魅力度アップ作戦を決行してやろうというのだ！

そうして収集した“文句”的トップスリーが、①制服がダサくて不評、②部活が少ない、③小テストが多過ぎる、以上の厳選された3点だった。中でも、彼女たちに思い入れが強いと感じたのが、①の「制服がダサくて不評」という“文句”

あの場で、高校生にして思ったことをスパッと決断できるその判断力にはかなり驚かされたMOのメンバーたち。こうして見事にギャルマインドを発散しまくった2人は、いつも増してキラッキラに輝いていた。



課題じゃなくて、私たちの文句！

M

DEAR 保坂愛来

こんばんは。今日はありがとうございました！ 今日の最終報告会では、自分たちの身近な学校の問題について深く考える機会を得ることができました。また、他のチームの発表を聞きながら、小さなことでも詳しく観察したり、調査したりすることで新たな事実や共感を得ることができると改めを感じました。まさか自分がモチベーションを上げるためにデコっていた古文単語か

周りを観察し、
深く調査する
姿勢を持ち続けたい

ら、これほど話を広げられるとは思ってませんでした（笑）。

また、自分たちで考えた制服について私たちは可愛い！ こう変えられたらしいのに！ 思つていましたが、自分の学校の制服に似ているけれどあまり気に入らないというふうに言っていた参加者がいたように、キュアまーいどの方が発表した地元に対する価値観の違いのようなもの

が、制服に対する評価もあるんだなと思いました。

長くもあり短くも感じられたこの半年間、多様な方々の話を聞き、多くの学びを得ることができました。この自由な研究活動において、迷惑をおかけした部分があり申し訳なかったです。当初は軽い気持ちで参加したもの、この活動を通じて自分の関心事への視野を広げ、観察することの楽しさを発見できたことを嬉しく思っています。今後も好奇心を大切にし、周りを観察し、深く調査する姿勢を持ち続けたいと思います。夜分遅くに長文をお送りし、申し訳ございません。今後ともご縁がございましたら、どうぞよろしくお願いいたします。

DEAR 保坂愛来



「違和感」と
「苛立ち」という
一番の収穫

プロジェクトで得た一番の収穫は、この「違



こんばんは！ 今日は一日お疲れ様でした。MODの皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思い、このメッセージを打っています。この半年間、皆さんには沢山ご心配や迷惑をおかけしてしまいました。急に音信不通になつたり、かと思つたら約束を取り付けてきたり……。高校生として、皆さんの器の大きさに甘えてしました。その節はとても反省しております。

最終成果報告会では、今の自分たちが感じていたモヤモヤを充分に発散できたと思いました。帰宅後、早速皆さんから頂いた付箋を見てみたら、内容に共感してくれるものが多かつて、私たち以外にも不満を感じている人は少なくないのだと知りました。その反面、それなのに、変わろうとした。だからこそ、ギャルというレッテルで反抗したくなつたのかもしれません。

思つたより長々となつてしまい、自分が一番驚いています。ですが、皆さんから教わったことはしっかりと私の心に、私だけの形で根付いています。私が大人になる頃には、若い子にこんな苦しい思いはさせたくないです。皆さんのおかげでそう気付くことができました。

約半年間、本当にありがとうございました。またご縁がありましたら、よろしくお願いします。

DEAR 進藤悠花

DEAR 進藤悠花

秋田の良いところ

なんて……



見方次第で

そんなもん
いくらでもあるだろ

ピタゴラス数

チーム『ピタゴラス数』の左から、一関夢人くん、佐々木葵生くん、佐藤 廉くん



初めてプロジェクトに参加した初日から、ワークショップ会場の設営(看板設置)を手伝ってくれる『ピタゴラス数』のメンバー。過去にこんな積極的な参加者、見たことない……(驚笑)



無駄に多くて、逆に不便な自転車止めの観察



不思議な雪の積もり方の観察 [写真提供:一関くん]

具の色」、「高専の南門にある自転車止めの本気度」など、観察は場所、時間、ジャンルを問わず続き、気づけば全参加者の中でも1、2位の投稿数にのぼっていた。

電車やバス、駅周辺の観察はもちろんのこと、それ以外にも「ガードレールに積もった雪の形」、「道端に落ちている絵の

「友情とカオス」そんなタイトルをつけたくなってしまったチーム『ピタゴラス数』の観察の旅。高専1年生、自称鉄オタの一関くんが声を掛けたのは、同じクラスの文系男子・佐藤くんと初代秋田デュエル王者・佐々木くんだった。趣味も性格も、頭の良さもそれぞれ違う3人だが、なぜか仲が良く相性もいい。そんな3人は、まるでピタゴラスの定理(各辺の比率が3:4:5だった場合、その三角形は必ず直角三角形になる)における各辺のようだ……というなんとも高専生らしい理由で『ピタゴラス数』というチーム名は名付けられた。

そんな、今期唯一の男子3人組チームは、毎度のごとくワーキングショップに誰よりも早くやって来ては、会場設営などの事前準備を手伝ってくれた。彼らの前めりな姿勢を終始引っ張り続けたのは、やはり発起人、一関くんの観察力だっただろう。自称鉄オタというだけあって電車やバス、駅周辺の観察はもちろんのこと、それ以外にも「ガードレールに積もった雪の形」、「道端に落ちている絵の

そんな折に開かれた2回目の集中ワーキングショップにて、『3Lチューパット』(以下、『3L』) (p.36) という女子高生チームが、四ツ小屋駅の観察をしていることを知る。一関くん含むピタゴラス数は、プロジェクトの運営チームであるMODのメンバーからの助言もあり、なんとクリスマスイブにも関わらず四ツ小屋駅に集まつた。事前に一関くんが解説した長いホームを実際に端まで歩いた後、駅構内も観察。その後『3L』の地元である御所野に観察の現場を移し、住宅街には似合わない「熊出没注意」というサインにも心底驚く。

こうして彼らはチームの枠を超えてカオスにつながり始めるのだが、彼らの観察から湧いてくる好奇心には、それ程の強度があった。MODのメンバーが彼らが手配をしてくれた秋田市の会場で面会した際にも、先に集まつた一関くんと佐藤くんは、「集合時間にちょっと遅れる」というMODOのメンバーの言葉に対して、「ちょっとつて何分だろう?」という問い合わせ立て、普段の何気ない出来事

正直な「なんか気になる……」を



NHKの秦さん(左)と3Lチューパットの村木さん(右)と
[写真提供:ピタゴラス数]



緑屋ビルの看板観察の末に辿り着いた、近隣店舗の取材



く。「自分にとつては普通でも、他の人にとつてはまた違う見方があるのだといふことを知った」と語る佐々木くんは、最終成果報告会に、彼の得意な絵で、チム『ピタゴラス数』にロゴをデザインして添えた。また、佐藤くんは「(観察が)周囲の人や自分について深く知るきっかけになった」と語り、文系である自分を活かして、最終成果報告会の後日に放送されたラジオ収録用の原稿を作成した。そして、一関くんを中心に、12ページに渡る報告書を徹夜で作成し、この半年を経た3人にはしかできない、高専生らしい前のめり全開の発表となつた。

最後に、以前にメディアの方(NHK秋田放送局ディレクターの秦圭矢乃さん)に取材で聞かれ、上手く答えられなかつた「秋田の良いところは?」という質問に、一関くんが改めてこう答えて、彼らの発表の最後を締めくつた。

「見方次第でそんなもんいくらでもある。私は、この半年間の観察を通じて、多くの人たちに“多様な視点”というものを理解してもらつて、各々が感じる



集合時間に8分遅れてやってきたMODの黒崎(左)、すみません……



3Lチューパットの2人と四ツ小屋駅の観察

をして、観察のフィールドが自分たちの生活領域をはみ出していくにつれて、彼らは“高専生としての自分”を意識するようになる。最終成果報告会間近となつた3月6日、彼らは「国語・算数・理科・デザイン!」の全メンバーに向けて高専見学会を企画・開催した。高専内を案内する中で、自分たちがチームメンバーにも、外部の人たちにも、それぞれ違つて映つてることに気づき、高専生としての自分たちがさらに“気になつて”いる。

こうした一関くんを筆頭とした彼らの確かな観察量と、そこから生まれた正直な「なんか気になる……」は、次第に彼らと地域を近づけていく。

『3L』のメンバーがアップした「秋田駅前にある緑屋ビルの看板の1文字が消えた」という観察投稿(詳細はp.36)をみると、『3L』の村木さんと共に現場を探りに街に繰り出す一関くん。周辺を捜索した後、近隣のお店に聞き込みを行い、ついにはビルの管理人にまで巡り合つてしまつたのだ。

『3L』のメンバーがアップした「秋田駅前にある緑屋ビルの看板の1文字が消えた」という観察投稿(詳細はp.36)をみると、『3L』の村木さんと共に現場を探りに街に繰り出す一関くん。周辺を捜索した後、近隣のお店に聞き込みを行い、ついにはビルの管理人にまで巡り合つてしまつたのだ。

この半年間、秋田という地域を、どのチームよりも観てきた(観察投稿数で比較した場合)『ピタゴラス数』だからこそ導きだせた、嘘のない強度のあるこの言葉は、私たちに“地域つながる”ということの根っこ・本質の部分を真っ直ぐに示唆してくれたように思う。

武家屋敷と 画鉢の旅

sugar

角館高校「ディベート部」に所属している『sugar』の2人は、昨年の「国語・算数・理科・デザイン!」に参加くれたチーム「in the morning」のメンバー・佐々木さんの後輩だった。佐々木さんは、今年のプロジェクトの企画・運営に関わってくれた高校生運営チーム「COO」「ちょっとお尻を出す」の略)以下、COO)のメンバーの一人でもある。

そんな「in the morning」が同校の文化祭で、「国語・算数・理科・デザイン!」での半年間にについて熱弁しているのを見て興味が湧き、その後配布された「足・目・耳」が大胆に描かれた参加者募集チラシに「今の私には無い、斬新さが得られるかもしれない(佐藤さん)と、羽川さんと2人でチーム『sugar』を結成し参加を決意した。

父がマタギでもあるという羽川さんは「空き地の花を仕切る紐」や「夏に枯れ始めた木の葉」など、植物周りから観察を始めたのに対して、大工の父を持つ佐藤さんは「家の周りや屋根の作り」「使われなくなつた百葉箱」など、構造物周



チーム『sugar』の左から、佐藤ひかりさん、羽川如葉さん



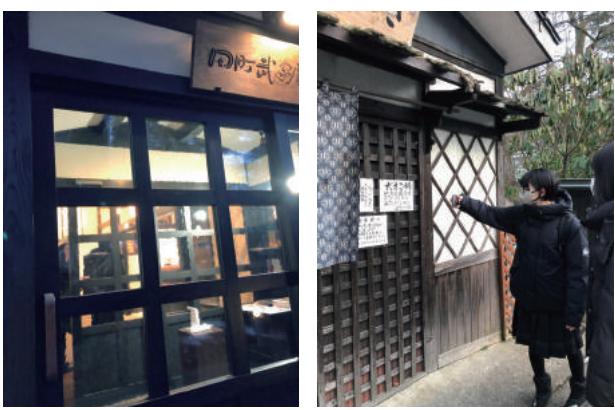
〔写真提供:sugar〕

訪れた際、1時間という短い時間にもかかわらず「これから武家屋敷に行って一緒に画鉢を観察したいんです」と誘われ、すぐさま武家屋敷通りに向かった。居酒屋の外壁に貼り出されたメニューが画鉢で留められているのを見つけると、「い

りの観察が目立つた。また、学校では「窓側の席の生徒が、カーテンで防ぎきれないと差しの餅食になる悲劇」、「網戸が付いていない窓の謎」、「缶や瓶の蓋がキヤップタイプと、飲み切りタイプで分かれている謎」など、確かに言われると気になる「なんでそうなつてるの?」を発見しては面白がっていく。

そんなある日、2人は「押し手が折れて針だけになり、もはや壁から抜けなくなってしまった画鉢」を見つける。折れやすく、一度折れたら抜くことは難しい……という、画鉢の意外な盲点に気づいた彼女たちは「シンプルに折れない画鉢ってどんなの?」と調べてみるも、見つけられたのは、抜きやすさや、ピン跡に配慮した画鉢ばかりで、理想の画鉢を見つけることはできなかつた。

この結果に納得がいかない2人は、画鉢の観察を続けるのだが、その熱量はMODの想像を越えていく。2人の近況を聞くと、MODのメンバーが角館を



いざ、角館の武家屋敷通りへ観察調査に!

〔写真提供:sugar〕

つから使ってるんだろう?」「メニュー

は取り替えないのか?」「画鋲はずつと
同じものを使ってるのか?」……と、彼

女たちの“気になる”がとまらない。そ
してモヤモヤが頂点に達した彼女たち

は、なんと開店前で準備中のお店の扉を

叩いて、話を聞き始めた。

「この人はたちは、一体何をしに来たん
だ?」という表情で店員に警戒されるな
か、「県事業の活動の一貫で……、画鋲
について聞きたいんですが……」と、恐
る恐る質問をし始めたと思ったら、意外
にも話は弾み、いつの間にか2軒目の扉
も叩く2人! 重要文化財の外壁に直接
画鋲で「落雪注意」の貼り紙がされてい
ることも衝撃だったが、それよりも、屋
外で使用される画鋲が“サビて脆くなっ
ている”という新事実に辿り着く。画鋲
が折れてしまうことに「サビ」が関係し
ているということを自らの足と耳で掴み
取った2人は、つまり『折れにくい画鋲
とは、サビにくい画鋲なのではないか?』
とこの時点での一つの答えに辿り着く。
それにしても、画鋲を観察するために

武家屋敷に出掛ける女子高生がかつてい
ただろうか? 画鋲を探すのに苦労して
いた2人は、なぜか「武家屋敷ならある
んじゃないか(羽川さん)」と思つたとい
う。それは、この場所で高校生活を送る
彼女たちだから持てた、地域の感覚なの
ではないだろうか。武家屋敷を身近に感
じていたからこそ、観察に出掛け、扉を
叩き、直接地域の方々に話を聞くことが
できた。『画鋲の折れやすさ』という自
分たちの疑問に迫っていたはずが、最終
的には地域という文脈をより強く認識す
る結果となっていた。画鋲一つでここま
で武家屋敷とつながれた『sugor』の2
人に、改めて地域とつながることにおいて、
「足を使って観て、聞く」というこ
との重要性を教えてもらった気がする。
プロジェクトが始まる前の面接当初、
自分には斬新さが無いと語っていた佐藤
さんは、すっかり「知らない人に疑問を
ぶつけてしまえる」斬新な人になつてい
た。「これからも画鋲を見続けたい」と
語る2人の旅路が、今後どのように展開
していくのか楽しみでしようがない。





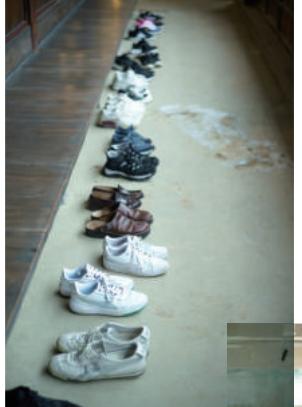
25

P25

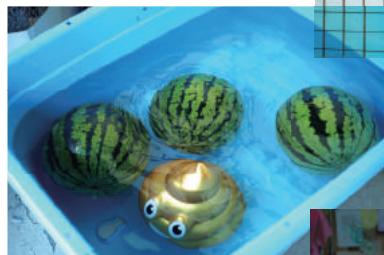
24

P24

デザイン！



理科



算数



国語



“大切に する”とい う 地域に情 感の 先感地

スキキライ

湯沢翔北高校の写真部の女子2人。幼稚園から高校まで、部活も同じ仲良しの2人で結成したチーム名『スキキライ』の由来は、お互いの好きなもの、嫌いなものが逆転していること。それを互いにぶつけあっていけば、嫌いなものも好きになれるかもしれない……という、そんな想いがこの名前には詰まっている。

先生からの紹介でプログラムを知り、過去のプロジェクト活動記録本を読み、自由に探究したり表現できることに魅力を感じて応募した。

2回目の集中ワークショップの発表の場で、開口一番「忙しくてなにも準備せずに来ました！」と堂々と宣言。他の全チームがスライドを用意している中、2人は手元に何も無いなかでも楽しそうにイキイキと話し始める。学校のプログラムで、三関の地域を訪れ、特産品づくりのお手伝いや、地域の課題をうかがった体験について語り、今後もこの三関で活動してみたいと意気込みを語っていた。

例年、このプロジェクトへの参加者が多い湯沢翔北高校では、日頃から地域と

の連携が求められており、授業の一貫に「地域課題の解決」という命題が組み込まれている。2年生からは地域プロジェクトとして、三関のさくらんぼなどの特産品を活用した商品開発に関する授業がある。特産品開発や地域課題は、地域側の需要もあり、学校の学びの題材として扱われやすいテーマ・状況になっている。一人一人の関心を育む探究の時間ではあるものの、地域側の需要によるテーマ設定があることに息苦しさを感じる学生もいる。必ずしも最初から、「SDGs」や「地域活性化」にすべての高校生が関心を持っているわけではない。『スキキライ』の2人がこのプログラムへ参加したいと思ったきっかけは、“自由に探究したり表現できること”。とにかく、この「国語・算数・理科・デザイン！」のプログラムで取り組む観察対象は、参加者の本音にすべて任せている。生徒が観察の先に見つけた小さな関心から始め、その関心を広げ育みながら、心が動く問い合わせていく。その過程の中で、結果として“地域につながる”という本当

学生の本音を起点に
地域に気付きつながっていく



のアクション・デザインが待っている。地域を起点に学生をつなぐのではなく、学生の本音を起点に、地域に気付きつながってゆくことを目指している。どこまでも、学生の主体性を尊重するところに、高校生が求める自由があるのだと思う。

2人の観察は、プロジェクトの期間中に林崎さんが唯一投稿した、学校の壁面に使われないまま、密集している「画鋲」に始まる。前述のチーム『sugar (P20)』に続く、まさかの小さな「画鋲」に惹かれる女子高生がここにもいるとは(驚)！

彼女たちは観察の先に、最近「画鋲」を使うている人が少ない理由として、①ホワイトボードの増加（マグネットを使用する機械の増加）、②壁に穴を開けたくない、③SNSで情報発信する機会が増加したこと等々を挙げ、「画鋲」という存在について考察を深めていく。また、「画鋲」というものの機能そのものについても考察し、①軽いものを支える（掛けておく）ための機能、②壁面にアートするためのパーツ素材としての機能、③手づくり如雨露を作るための穴空け機能

（ス内）で活用されている「画鋲」の状況。その状況への疑問について、役所職員へ質問し、地域との関係を築いていた。

そして、発表の最後。使い終わった後に放置された「画鋲」に対し、『大切に画鋲が使われていないこと』に気づき、「画鋲」が大切に使われ続けるためには、使った後に片付けたくなる「画鋲」のデザインが必要だと思いついた2人は、なんと「画鋲」の持ち手が47都道府県の形になつていて、使い終わった「画鋲」は元の日本地図に戻す（片付ける）ことのできる「画鋲」のデザイン案を発表（驚）！

観察を通して自身に向き合い気付いた感情は、『大切にする』こと。「使われなくなつたものを再活用する」というマインズをプラスにする「発想から、『大切にする』という感情が内面で動いたとき、地域はもつと愛おしく映つて観えてくるはず。活性化の対象としての地域ではなく、「私たちが暮らす地域」という認識へ。「画鋲」という小さなものから大きなものまで、彼女たちが心を寄せる関心はこれからも広がっていく。



鍵が空いてる掲示場
クリップが掛けてある



昔は使われていたけど、今は使われなくなつたもの



最終成果報告会での発表の最後に、会場を沸かせた『スキキライ』の画鋲デザイン案！デザイン案を提案しつつも、「子供の教材として使えるけど、大人は使い辛いかも」「1つあたりのコストが高くなるかも」「幅をとっちゃうかも」……など懸念される点について発表していた姿勢もグッド！

[発表資料提供：スキキライ]



等々を挙げ、あたかもデザイナー的な観察を展開していく。

そんな「画鋲」を観察する思考と並行して『スキキライ』の2人が目を付けたのが、学校からすぐの湯沢市役所向かいの山（小さな丘）の上にある、使われなくなつたステージ。「昔は使われていたけど、今は使われなくなつたもの」に関心があり、この場所をなんとかできなかと考えを巡らしていく。彼女たち2人は、観察対象から課題設定へと急ぐ傾向があり、自身や地域への関心を育む前に、社会にとつての成績を出す意味での「地域活性化」への意識に向かいがちな様子が見られ、運営チームMODOのメンバーは、その姿勢を少し懸念もしていた。

そして迎えた最終成果報告会。彼らたちは、学内でのプログラムの一貫であつた三回の活動の報告ではなく、最初に観察の対象となつた「画鋲」をテーマに発表の場に立つた（というか、正確にはリラックスしてステージの台に座つて発表した！）。使われなくなつたステージの向かいにある、湯沢市役所前の掲示場（ガラスケー

チーム名の中に「Creation（創造）」という言葉を選んだ、秋田南高校の青木千鳳（C）さんと佐藤歩香（H）さん達2人チーム『H&C Creations（以下、H&C）』は、まさにその名の通り、このプロジェクトが始めた当初から、既にデザイン的な観察の視点を身に付けていた印象のチームだった。そんなH&Cの1人、青木さんが最初に観察し気になったものが、餃子や牛タンが買える珍しい自動販売機の存在。そして一方の佐藤さんは「行動経済学」というデザインの領域に近い学問への興味が湧き出し、その観察の眼は、広い世界をぐいぐい観るようになっていく。



秋田市内で発見した不思議空間。普通なら見過ごしてしまう何気ない風景が2チームを結びつけ、地域とつながるための体力や気持ちを養うきっかけとなっていました。

[写真提供:H&C Creations / キュアまーめいど]

ある日そんな2人は秋田市内で、ある不思議な入口が設られた空間に遭遇する。緑色の枠のドアのすぐ先には、もう一つ白いドアがあり、その白いドアの方に向に背を向けるかのように不自然な方向を向いて整然と並べられたスリッパ。そして、不思議な位置に置かれた傘立て。じっくり観れば観るほど、一つ一つのモノが配置された状況・空間に違和感を感じていった。

じ、この空間を見過ごせなくなる2人がいた。そうして、そんな2人の観察・違和感に共感したチームが角館高校のチーム『キュアまーめいど』（P6）だ。『キュアまーめいど』はどうしてもこの異空間が気になってしまい、わざわざH&Cの2人と予定を合わせて、実際にこの不思議空間を一緒に観にいくことを決行してくれた。勇気を出して、近所の方に「あの不思議空間はなんなのか？」と探索していく彼らの行動は、まさに地域を自分事にし、つながっていこうとする、このプロジェクトが何よりも大事にする姿勢そのものだった。中間報告会の際、青木さんは「他のチームの人たちが、私が気になった観察の投稿を見て共感し、気になつてくれたことが嬉しかった」と言葉にしている。こうしてチーム間での交流が生まれ、彼らの観察や気持ちが横断し、融合していく過程は、これまでのこのプロジェクトには見られなかつた新しい価値ある風景だった。

そしてH&Cの2人は、高校生活の一大イベントである修学旅行先でも、その



チーム『H&C Creations』の、
青木千鳳さん（左）、佐藤歩香さん



H&C Creations
東北ツコアー!
てんぱん?



秋田 AKITA →

岩手 IWATE →

青森 AOMORI →

宮城 MIYAGI →



福島 FUKUSHIMA →



山形 YAMAGATA →



[映像提供:H&C Creations]



最終成果報告会で、「思い切ってやることの感情が大事なんだな（青木さん）」、「様々な関係やご縁、機会を逃さず、自分ものにする力が大事なんだな（歩香さん）」と、旅を終えた2人は、何かを確信した晴れやかな表情で言葉にした。秋田県という小さな枠・地域を超えて、東北6県をたった1日で駆け抜けるという弾丸ツアーを成し遂げた彼女たちの観察眼に、これから秋田という地域はどうのように映つてゆくのだろうか？ これからの彼女たちの“Creation”がとにかく楽しみでならない。

デザイントローリングの看板が、では真っ赤なツルハドラッグの看板が、修学旅行先である京都という街では、景観を損なわないようにシックなトーンで仕上げられているという事実。自分たちが暮らす秋田から離れた土地の、そんな何気ない風景の在り方に素直に驚き、感じられるようになる2人がいた。

後日、ますます観察やデザインに興味を向け始めた2人は、プロジェクトのアドバイザー兼・MODのメンバーでもある澁谷の事務所（澁谷デザイン事務所）を訪れる。そこで彼が高校生の頃、2年生がヒッチハイクで北海道まで行ってしまふ……なんて、これまで考えもしなかった無謀な話に感化されてしまったのか、H&Cの2人は、JR東日本のたった1日1万円で東北をどこまでも旅できるお得なチケット「キュンバス」の存在・情報をゲットし、とんでもない行動・作戦を思いついてしまう。そう、その名も『東北こてんぱんツアー』だ！

たつた1日で
東北を一周してやる！



秋田市内から鈍行列車に乗って、週末は無人駅の「飯詰駅」に降り立った2人は、いざ！ 澁谷デザイン事務所へ！



秋田のツルハドラッグ
京都のツルハドラッグ
山形のツルハドラッグ

[写真提供:H&C Creations]

普段から様々な場面で父親に論破されることに悔しさを覚えていた青木さんは、「いつの日か法律を極めて、父親のことを“こてんぱん”にしてやりたいんです！」と本音を吐く。一方で、父親が旅のプランを立てることが好き（得意）で、家族でよく一緒に旅をしていた思い出のある佐藤さんは、「旅の計画を立てることが好きなんです！」と言う。そんな父親という存在の影響をたっぷりと受けた2人がタッグを組んで実現してしまったのが、たつた1日で東北6県を旅してしまおうという、東北観察弾丸ツアー『東北こてんぱんツアー』だった。この「東北こてんぱんツアー」では、彼女たちがプロジェクト開始当初から、観察を通じて気になっていた「自動販売機とバス停」という存在を、東北6県各所で観察し巡ることが一番の目的で、なんとも目的自体は地味なものであります。若さ溢れるパワフルなツアーがここに実現した。

イ・ノ・テ・ノ・ア・と・い・う 地・域・の な・ぞ・な・ぞ・!?

『3Lチューパット
(エル3リットルチューパット)



すべては村木さん一人の衝動から始まつた。「一緒にチームを組んでくれる相方が見つかっていなくて、でも参加したくて……」。そう、このプロジェクトは2人以上のグループでの参加が条件なのだが、そんな「一人でも、何かがしたい人」を熱烈に応援しないわけにはいかず。「できれば誰か仲間を見つけてチー

ムを組んでみてね」と、運営チームであるMODOからアドバイスをした後日、しばらくしてから「同じ中学時代の友人が一緒に参加してくれることになりました！」との朗報が。こうして村木さんと馬場さんによる、『3Lチューパット(以下、3L)』が誕生する。

そして無事にスタートが切れるや否

や、村木さんによる怒濤の観察投稿が始まつて。どうやら彼女の中で観察を面白がるスイッチが入つてしまつたようで(笑)、道に落ちているものから、看板、駅の長さ、みかんの皮……、見るものすべてにツッコミを入れてしまう日々。その観察量は、全参加者の中でも1、2位を争う投稿数にのぼつていた。

そして、その勢いに負けじと馬場さんの観察・視線は、地元の風景やお菓子のパッケージに向けられていった。このプロジェクトの学生とのやりとりや、情報タンクの場となつてているSlack上では、チームの2人の間でお互いの投稿にツッコミ合つたり、対話をする姿まで。

そんな観察の日々を送りつつ、いよいよプロジェクトが中盤に差し掛かった頃、村木さんは自身が以前から気になっていた「JR四ツ小屋駅(特にホームの長さ)の謎」を解明するため、実際に現地へ向かうことにする(詳細はP.18)。するとチーム『ピタゴラス数』(P.16)随一の鉄オタ・一関くんを筆頭に、『ピタゴラス数』の佐藤くんと佐々木くんも同行し

てくれることに。「こうしてチームを超えてコラボレーションをするという今年度のプログラムを象徴する化学変化が、ここでも生まれるようになつてゆく。そんな状況について、「色々な発見をして、その感動を他のチームと共有するのは幸せな時間でした!」と村木さんは最終成績報告会で振り返っていた。

そして、そんな村木さんが秋田駅前で観察・発見し気になつていたものの一つに、秋田駅西口にある緑屋ビルの「イノテノア」という不思議な看板がある。この看板の調査や聞き込みも、「ビタゴラス数」の一閑くんと一緒にプロジェクト終盤ギリギリまで行うなど、その知の欲求は益々止まらない。だって、元々「インテリア」と表示されていたと思われる看板から「ン」の字の点部分と、「リ」の短い縦棒の一画が朽ちて剥がれ落ち、「イノテノア」になり、さらにまた時が経ち風化が進んで、頭文字の「イ」の文字まで剥がれ落ちて、最終的には「ノテリア」になってしまっているんだから、気になつてしまふがいい! もしかした

今でこそ別々の高校に通つているが、今

も住む街は同じ。幼少の頃から見てきた

街の風景は共通していた。「あそこの階

段ってなんであるんだろう?」「あの煙

突の存在が気になるよね」、そんな地元

の気になるスポット談義に花が咲いてゆ

く。さらには、馬場さんが気になつてい

た「お菓子のパッケージに書かれている

誘惑するような甘い文言」についても言

及。まだ気になつていて多くの店にも行

けないようだが、最終成果報告会の

場で取り上げるテーマとしては、この

テーマも捨て難い。2人の興味が溢れ出

し、最終成果報告会に向けて一体何に絞

るべきなのか……と思案していたようだ

が、チームMODのメンバーからの意見

はズバリ「全部やつてみよう!」だった。

気になるのなら衝動でしょ! 自分の中

にある正直なことを整理してしまう必要

なんて無い! そんなこんなで、テスト

期間が明けたらバンバン動いていこうと

いうことでミーティングは終了。ミー

ティング中はもちろん色々な方向に話が

脱線したが、終始3人でゲラゲラ笑つて

いたことが印象的だった。

そして最終成果報告会の日。これまでの半年間の観察の経緯から、2人で集めたお菓子のパッケージを分析したものまで、これまで茶目っ氣たっぷり、遊び心に溢れたスライドで表現してくれた2人は、突然「私たちがこれまで観察投稿していたSlack上で、密かに『なぞなぞ』を仕掛けていたんですけど、気付いた方はいましたか?」というサプライズ。見事に参加者ははじめ、チームMOD&COも気がつかず……、一本やられた! そんな小さな日常を楽しむチカラを遺憾無く発揮する『3L』らしい演出が、最後の最後まで光った、会の締め括りとなつた。

最初は村木さんたつた一人だったこと

が嘘のよう、多くの仲間や地域の人々

とつながつていったチーム『3L』。観察

し、自分の衝動に素直に動くことで大き

なムードメントを起こす。それこそが

『3Lチューパット』というデザインなのだ

と実感し、地域と若者がつながるための

プロジェクトが目指すところの本質なの

だと、改めて確信した時間だった。



お菓子のパッケージに書かれている、消費者を誘惑するような甘い文言への「疑問」や「ツッコミ」のオンパレード!
全約20種にもおよぶパッケージに対する「疑問」や「ツッコミ」は、いかに私たちが何気ない言葉のデザイン・操作に踊らされているのかを容赦無く炙り出してくれていた!



2023年8月30日時点での「イノテノア」



2024年2月18日時点での「ノテノア」

インテリア→イノテノア→ノテノア

〔写真提供:村木さん／一閑くん〕

初旬に『3L』の2人とミーティングをした時の話。2人が指定してくれた国際教養大学のラウンジコーナーで、お土産のみかんを3人で食べながら今後の方針を話し合ったことがあつた。中学時代の友人同士である村木さんと馬場さんは、誰が導いたわけでもなく、自らの興味から街に飛び込み、勝手に地域や社会、メディアともつながつていく彼らの姿には、MODとCOのメンバーそれぞれに驚きを隠せなかつた。

そうして、時期は少し戻るが、2月の初旬に『3L』の2人とミーティングをした時の話。2人が指定してくれた国際教養大学のラウンジコーナーで、お土産のみかんを3人で食べながら今後の方針を話し合ったことがあつた。中学時代の友人同士である村木さんと馬場さんは、「イ」の看板が緑屋ビル周辺に落ちているかもしれない、と、搜索しに行きたくなる気持ちは、もう止められないのだ! ということで、緑屋ビル周辺を探索したが、「イ」の文字看板は落ちておらず、その後、近隣のお店にも聞き込みを行い、ついにはビルの管理人にまで巡り合つてしまつた。村木さんと一閑くんの2人(詳細はP18)。その熱量には、地域のメディアも惹きつけられ、NHK秋田放送局の秦さん(P19)は、彼らの前のめりな奮闘ぶりをNHKの番組にもしてくれた。

誰が導いたわけでもなく、自らの興味から街に飛び込み、勝手に地域や社会、メディアともつながつていく彼らの姿には、MODとCOのメンバーそれぞれに驚きを隠せなかつた。

ら「イ」の看板が緑屋ビル周辺に落ちているかもしれない、と、搜索しに行きたくなる気持ちは、もう止められないのだ! ということで、緑屋ビル周辺を探索したが、「イ」の文字看板は落ちておらず、その後、近隣のお店にも聞き込みを行い、ついにはビルの管理人にまで巡り合つてしまつた。村木さんと一閑くんの2人(詳細はP18)。その熱量には、地域のメディアも惹きつけられ、NHK秋田放送局の秦さん(P19)は、彼らの前のめりな奮闘ぶりをNHKの番組にもしてくれた。

昨年に続いての
リベンジ!

感謝する姿勢を 観察したい

チョコ依存症

「今までワークショップに一度も参加できず、最終成果報告会を終えて悔いが残っています……。今日の最終成果報告会を通して『国語・算数・理科・デザイン!』にさらに興味を持ちました。今後もこのプロジェクトに関わり、日常の中で見つけた気付きや感想をどんどん伝えていきたいです! そのようなことは可能でしょうか……? (全文は2022年度のアーカイブ本に掲載)」

これは、ちょうど1年前、2022年度の最終成果報告会終了後、その日の夜

に『27』というチームの加藤友奈さんと一緒に『27』という一人の生徒から届いたメッセージ。一度はプロジェクトに参加する意思表示をしたにも関わらず、結果的に自分が納得のいく結果を出せなかつたことを悔しく思った彼女は、なんと昨年に続き今年度のプロジェクトにも、果敢に一人で再びチャレンジすることを決意。再チャレンジに際して考えた自身のチーム名は、『チョコ依存症』。ストレスを溜めやすい自分、そして、そのストレスを解消するためにお菓子(チョコ)を食べてしまう自分を『チョコ依存症』とネーミン



昨年2022年度のプロジェクトにも、新屋高校の友人と2人で組んだチーム「27」として参加していた加藤さん。最終成果報告会の当日は急遽友人が欠席という一人心細い状況のなかで、堂々と発表のステージに上がった姿が印象的だった。

ができるところが、なんとも彼女らしい。ちなみに昨年度の彼女のチーム『27』が観察したテーマは、「お菓子とストレス」の関係についてだった。

そんな彼女の2年目の観察は、家の玄関先のコンクリートの隙間から、突如として咲き出した花が抜き捨てられない状況や、家族の心理を観察したり。人はよく「間もなく行きます」「間もなくできます」という言葉を使うけれど、「具体的に“間もなく”とはいつたい何分なの?」といふような、曖昧な認識の中で日々使われてしまっている言葉の観察など、他チークとはどこか一味違った視点が感じられるものだった。

2023年度に入り、新屋高校の生徒会長に立候補したという加藤さん。10月に開催された2回目の集中ワークショップの場で「ストレスを感じやすい私は、生徒会長になり、今にも胃に穴が空きそうですね!」と、昨年に続いて「ストレス」というキーワードを軸に発表。正直なところ、生徒会長のストレスがあまりに大きくて、昨年度に続いて今年度もこのプ

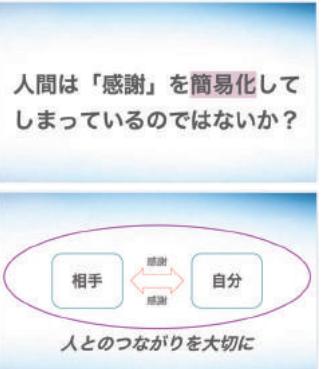
プロジェクトを諦めそうになつた自分がいた……と、後から本音を話してくれた加藤さんの気持ちも正直であり、そのことを隠さずにMODOのメンバーに話してくれた、彼女の姿勢も印象的だった。

そうして「ストレス」という日常の負荷に日々鍛えられたからだろうか（笑）、彼女の根っここの気持ちは、以前にも増して強くやさしく育まれていた。家族で東京ディズニーランドに行つた際、10月の集中ワークショップの会場で、他の参加チームの生徒たちに配るためのお土産（お菓子）を用意してきついた彼女。まだ若い高校生にとって、このような気遣い・気配りができるのは、そうそう簡単なことではないだろう。

そんな強くやさしく成長した加藤さんは、日々の暮らしや人の営みを観察するなかで、人が人に「感謝する」ということは、生きる上でとても大事なことなのでは……という深い考えに至つていた。そして、自身の日常生活における「感謝する姿勢」について観察し、最終成果報告会で語り尽くしてみようと思い立つた

おもいやりのデザイン 感謝＝人とのつながり

人間は「感謝」を簡易化してしまっているのではないか？



昨年の最終成果報告会の後、学校の授業「総合的な探求授業」の一貫で、既に「感謝」に対する問題視を、「おもいやりのデザイン」と題し、言及・発表していた加藤さん〔資料提供：加藤友奈さん〕

「感謝こそが、人や地域とのつながり」なのだ。「感謝こそが、人や地域とのつながり」なのだ。この言葉は、2年目のステージで思い切り言葉にしてやろうと意気込んでいた。……が、しかし、最終成果報告会当日に体調を崩してしまった彼女は、最後のまま彼女の2年越しの気持ち・チャレンジを放つておくことなどできなかつた。MODOのメンバーは、最終成果報告会の数日後、彼女に実際に会いに行き、「感謝する姿勢」の観察について話を聞いてみた。

その時、加藤さんが話してくれた観察の中で興味深かったのが、加藤さんは普段、コンビニエンスストアやスーパーのレジで買い物をする際、必ずそのレジの店員さんに無意識に「ありがとうございます」と感謝の気持ちを伝える習慣があるのだというのだ。普通は、レジの店員がお客様に発する言葉を、お客様である加藤さんが店員に対して言葉にするという何気ない姿勢。そんな彼女の感概深いものだった。

「感謝」こそが、人や地域とのつながり

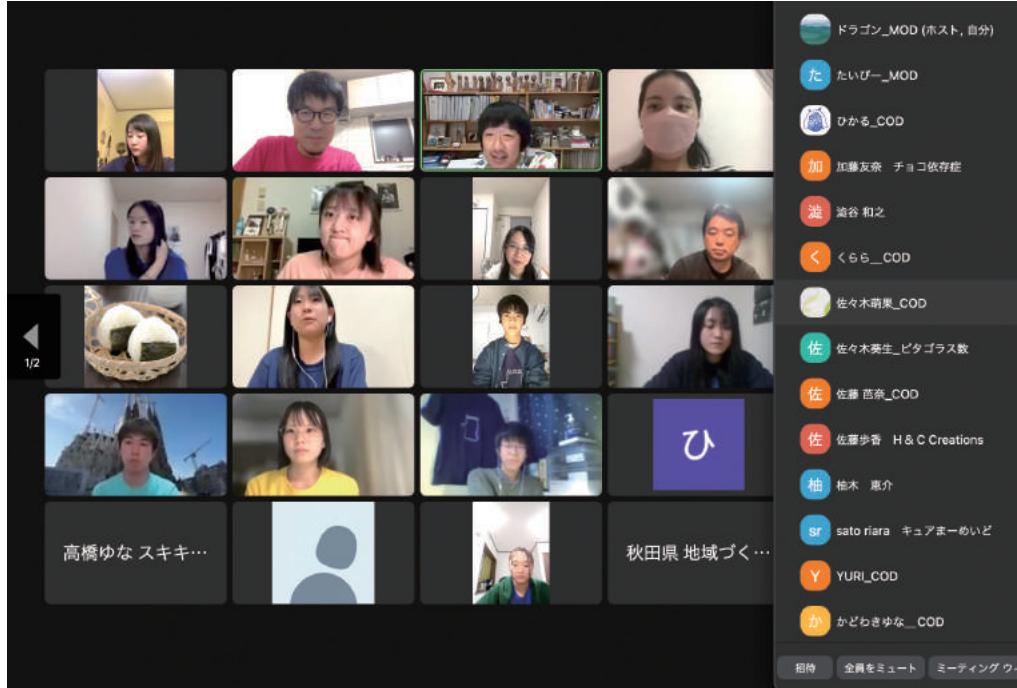


日常生活が気になつてしまつたMODOのメンバーは、今年のCODOのメンバーでもあり、現在新屋高校の副生徒会長として、生徒会長の加藤さんを支えている大倉未有さんにも声を掛け、近くのコンビニエンスストアへ向かつた。そして、太好きのコンビニの店員さんに「ありがとうございました」と感謝を伝える、彼女自身の普段のありのままの姿を見ることができた。

2年間、苦しみながらも精一杯このプロジェクトに向き合つてくれた加藤さんが、心から言葉にした「ありがとうございました」という何気ない感謝の一言。決して派手な最後のアクションではなかったが、その感謝の言葉やそれを声にする姿勢は、2年間このプロジェクトに挑戦した彼女だからこそ意味深さがあった。2年間このプロジェクトに粘り強くつながり続けたことこそが、彼女にとっての「地域につながる」大きな一步



であり、成果であった気がする。彼女が最後に言葉にしてくれた「ありがとうございました」は、この2年間で自分自身を成長させるきっかけになつたかもしれない。「国語・算数・理科・デザイン！」というプロジェクトへの、「ありがとうございました」という言葉が、どうございました」でもあるようだ、感慨深いものだった。



オンライン (zoom) 集中WS | 2023.9.21



「若者と地域をつなぐプロジェクト事業」事前説明会 | 2023年6月18日 | 秋田市文化創造館



第2回集中WS | 2023年10月15日 | 旧松倉家住宅 松倉



第1回集中WS | 2023年8月11日 | 秋田公立美術大学

『チームCODO』という、5年目の奇跡



また、地域とつながる力を育むのに、卒業生がプログラムを実施するほうが、参加者の学びが深まる可能性もあると感じていた。主体性を育む探究学習の場では、年齢の離れた大人と取り組むより、年齢が近い者同士で学ぶ方が、自然体の中で活動に取り組むことができる。「同世代ができるんだから自分だってできる！」と、学びを加速させていく。



結果は、本当に素晴らしいものだった。企画作りでは、プログラムの魅力が学生に届く伝え方を考え設計し、進行から参加者との関わり方まで、すべての段取りに気を配って運営し、参加者は緊張することなく楽しく前のめりに取り組めた。これは、大人が前で司会進行を務めていたらできない場の空気作りだった。

最終成果報告会で印象的だったのは、資料・スライドをただ棒読みで読み上げるチームがいなかつたこと。チームで寸劇をしたり、会場に向けてクイズをしたり、ステージ上に座って発表したり、全員が自身の言葉で語り伝えようとしているのが印象的だった。それは、これまでの

4年間では見られなかつた光景だつた。それが可能になつたのは、間違いなく運営する卒業生チーム『チームCODO』が、楽しく取り組んでいたからだ。大人たちが見えないところで、卒業生チームはグループを作り、プログラムの制作役割分担、資料作りなど、学園祭を楽しむかのように協力し合い、責任をもつて濃厚な議論を進めてくれた。大人の心配は全くもつての外れであり、余計な心配をしたこと、高校生だからと見くびついたことを、心から後悔・反省している。

『チームCODO』の多くが高校3年生で、この春に県内外の大学に進学が決まつた中で、「また来年も運営に関わりたい！」との声が聞けたのが嬉しい。

毎年学びが多いプログラムではあるが、今年ほど学びが深まつた1年はなかつたと自負している。『チームCODO』のみんなに心から感謝をしつつ、5年間事業を続けてきた中で育まれてきた関係性の上に、このような成果が生まれたことを、事業に関わった学生、地域の方々など、多くの皆さまと喜びたいと思う。

本事業に取り組みはじめて5年目。今年は大きなチャレンジがあつた。それは、プログラムの運営を過去のプロジェクトの参加者であった卒業生に協力してもらうこと。卒業生といつても、現役の女子高校生。事前説明会から、集中ワークショップ、最終成果報告会のプログラム受付など、ほぼすべての運営を担当した。きっかけは、彼女たち自身からの参加希望の申し出。「また来年もこのプログラムに関わりたい！」との嬉しい声だつた。この事業が5年目に入るためにあたり、運営チームが議論するなかで、この事業で大切にすべき価値は、これまで参加してくれた方々ともつながり、コミュニケーションが育まれていくことに気づく。地域とつながる力を育んだ人材を毎年輩出するだけではなく、彼ら同士がつながりコミュニティとなり、新たに彼らが周りと共につながる力を育み、広がっていくようなこと。もしそれが可能になるのなら、この事業の取り組みの価値を倍増させることができるはず。



49 最終成果報告会 | 2024年3月10日 | ABS秋田放送1F多目的ホールにて



akitade.jp

51

50

令和5年度
若者と地域をつなぐプロジェクト事業

国語・算数・理科・デザイン! 最終成果BOOK

《編集》
一般社団法人ドチャベンジャーズ

《編集・アートディレクション・デザイン》
澁谷 和之（澁谷デザイン事務所）

《写真》
鄭 伽倻（小宇宙感光）

《参加チーム（全8チーム | 発表順）》

- ・キュアまーめいど
- ・DEAR
- ・ピタゴラス数
- ・sugar
- ・スキライ
- ・H&C Creations
- ・13Lチューパット
- ・チョコ依存症

《運営・編集協力》

チームMOD（もっとお尻を出す）

黒崎 平（安養寺：好間風のある地域）

松嶋 駿（スタジオSSB）

袖木 恵介（秋田公立美術大学准教授）

澁谷 和之（澁谷デザイン事務所）

柳澤 龍（一般社団法人ドチャベンジャーズ）

鄭 伽倻（小宇宙感光）

チームCOD（ちょっとお尻を出す）

伊藤愛優菜／岩本莉々／大倉未有
門脇結那／鎌田ひかる／小林花補

佐々木萌果／佐藤芭奈

田畠優里／内藤 蓮（五十音順）

主催：秋田県あきた未来創造部地域づくり推進課
運営：一般社団法人ドチャベンジャーズ
企画・トータルディレクション：澁谷デザイン事務所

2024年3月発行

全8チームの
最終成果報告会の
様子はコチラから



これまで10年以上、「地域とつながる」と呼ぶ
れる仕事を色々な土地で行ってきた。
デザインやアートの力で…、という言われ
方もあるが、実は無力なことが多い、ほとんどの
場合が、逆に地域の方々にお世話になりっぱ
なしである。できることと言えば、そこに何遍
も通い一緒にご飯を食べること。逆に力仕事を
しようものなら、自らは全然役にも立てず、約
束の時間に行つたら予定していた作業はもうほ
とんど終わっていることも少なくない。そんな
情けないこと繰り返しているにもかかわらず、
お世話になつたと言つていただいたり、今も季
節の野菜が届いたりするのだ。これまでの自分
の経験からすると、「ただそこに通うこと」、「土
地や人に興味を持ち、話すこと」が、「地域につ
ながる」ことに他ならないのである。

今回、こうして観察をし続け、お互いの地域
へかい合つた高校生たちにも同じ現象が起つ
ていたのかもしれない。観察をきっかけに違和
感に気が付き、また現場へ行く。勇気を出して
人に聞き、深く調べようとするうちに、未知の
誰かとまた自然につながっていく。そこに居る
ことで物語が生まれた。そんな気がするのだ。
一方、世の中の流れの方は、特定の土地を持
たずできるだけ物はシェアし、擬似的空間で事
が処理されるよう加速していくようだ。そうな
ると、高校生たちが居たい地域 자체が見えなく
なっていく……のかかもしれない。果たして皆が
言う「地域とつながる」ことは、今後どう必要
とされ、どのように変容していくのか。これも
また深く観察していく必要がある。

秋田公立美術大学准教授

袖木 恵介

澁谷 和之

柳澤 龍

つい先日、「東北デ、東北で、デザインする
ということ」と題して、東北6県のデザイナー
が一堂に会するトークショーを企画し開催した。
その場で挙がった話のなかで、「最近の地方の
デザイナーは『地域のデザイナー』と呼ばれな
がら活動し、メディアにも注目されているけれ
ど、自分たちから「地域」という言葉を取り除
いたら何が残るのだろうか?」これから社会で
求められるデザイン・デザイナーとは、どのよ
うな在り方なのだろうか?」という議論があつ
た。地方創生が叫ばれ、だいぶ時が経つながで、
ここ数年「ローカルデザイン」「地域デザイン」
という言葉が使われはじめ、今では、それがど
こか、流行りの肩書き・言葉のように捉えら
れ始めようとしていることに違和感を感じ、心の
どこかで危惧をした。

「地域」とはなんだろう? 以前、このプロジェ
クトへの参加者の中に、「地域とは、道端ですれ
違つたら、自然に挨拶ができる人が暮らす範囲の
こと」と言葉にしてくれた生徒がいた。そく
らい「地域」とは、狭い日常に存在する当然の
領域のことでありながら、言葉にし定義しよう
とする、簡単なようで難しいもの。

そんな、双方いよいよ得体が分からなくなつ
てきた「デザイン」と「地域」という2つのキ
ワードを掛け合わせた取り組みこそが本事業で
あり、本年度は今一度、この2つを掛け合わせ
ることが、「地域」と「若者」をつなげていくこ
とにつながる意味を感じ直した半年間だった。
いやしかし、ホント、僕らは、つまり、まだま
だ無力なんだ……も確信した。

(以下、柳澤くんに続く)

本事業を通して5年間積み上げてきたものが
花開いた1年だった。学内行事で全校生徒の前
で、卒業生が本事業を紹介し、それを見た学生
が応募したり。アーカイブ冊子を見た教職員や
デザイナーが、オブザーバーとして通年参加し
たり。「国語・算数・理科・デザイン!」をテーマに、
毎年プログラムを磨き続け、1つの型に辿りつ
いた印象がある。

地域コミュニティの維持・活性化にむけ、若者
への社会参加を促す事業に取り組む前に、立ち
止まつてみた。時代の変化と共に、これから
社会を担う県民のあり方も20世紀と21世紀では
様変わりする。平成生まれの若者たちが作る社
会は、私たちが思い描いたものとは異なる。次
世代が作る社会に向かえた変化を促すのに必要な
ことは何か。スタンフォード大学での20年以上
にわたる研究結果は、「権限の移譲」。簡単に言
えば、既得権益を手放すこと。権力や地位のあ
る人が、その権利を手放すとき、社会はより良
い未来へ向かいはじめる。

そこで、今年は企画運営をCICO（過去にこの
プロジェクトに参加していた卒業生）と共に取り組ん
だ。事前説明会、集中ワークショップ、オンライン
ワークショップ、最終成果報告会、などのプロ
グラムも、これまでとは全く違う形になり、
参加者は過去最高に前のめりに取り組み素晴らしい
結果になった。

今年1年のプログラムを通しての学びは、若
者と地域がつながるのに、変わるべきは、私た
ちだったということ。私たちがもつ権限を手放
し、次世代と共に未来を作りたいと思う。